

# 犬山市のOJT実践を通して

中京大学 杉江修治

## 1. 犬山市の学校における研究的実践文化の定着

2001年度からはじまった犬山市の授業改革は、マスコミの報道や教育学の視点からの議論などからは、ともすると制度面での改革と捉えられがちではあるが、その最大の意義は市内14の小・中学校の実践文化を大きく変えたところにある（杉江修治 2003, 犬山市教育委員会 2005）。

2007年、改革を促し、バックアップした市長が多選の弊害を理由に自ら退き交代したことにより、行政からの支援は弱くなったが、改革から12年目を迎える2012年度の段階でも、市内の各学校では学び合いを基盤に置いた授業実践と、それをより効果的にするための学習集団づくりなどへの学校の意欲は継続しており、改革による教育文化の変化が持続しているといえる実態がある。数校は、全国的にも協同的な学びの実践校として先進的な位置づけを保ってきている。

犬山市の授業改革は、市独自の講師採用による少人数授業からはじまった。教員たちは、算数・数学、理科、英語といった少人数授業の手ごたえを、さらに他の教科にも広げようと試み、学級、学年、教科を越えた校内研修の形をとるようになっていった。

単なる実践の交換だけでは、一人一人の教員や学校そのものの成長はそれほど見込めない。確実に、実践における毎回の挑戦を記録し、検証し、次に生かすという研究的実践のサイクルをもっていなくては効果は薄い。犬山市内の学校の多くではそういったサイクルを定着させることで、児童生徒のよりよい変化を創り上げようとしてきた。

こういった文化の定着の背景には、改革当初の教育委員会のスタンスも重要な役割を果たした。教育委員会事務局は「学校の自律」こそが大事なのだという観点から、それぞれの学校の研究を支援した。発想を豊かにできる環境があれば、教員たちは本来の力を発揮する。自分たちの学校の課題を見つけ、解決に向かって教員集団として取り組む体制づくりを可能にした教育委員会のあり方についても、犬山市の事例は有意義である。

犬山市のある愛知県では、近年若手教員の採用が増え、校内の教員の年齢構成が一挙に若返ってきている。若手教員の成長支援は喫緊の課題となってきた。犬山市では、子どもの成長をよりよく支援するにはどうしたらよいかという、これまでの研究の流れがもたらすやりがいのある忙しさが若手教員を待っている。一方、学校体制で改革に取り組んできた、教員集団づくりの文化がある。こういう条件のもとで犬山市がどのような若手教員への成長支援の仕掛けをつくってきたかをここでは紹介する。

## 2. 学校をまたぐ授業研究会

犬山市には、学校をまたぐ教員研修の機会として「犬山市授業研究会」がある。これは改革が始まった 2001 年度の秋から、当時、市教委学校教育課の客員指導主幹として実践づくりの協力をしていた筆者が提案したものである。当初の改革の軸であった少人数授業を効果的に進めるための実践事例を、各校から集まった教員の交流の中で創り出していこうということがそのねらいであった。月に 1 回、16 時から 18 時まで開かれる。勤務時間にかかる時間帯ではあるが、教育委員会が研究会への派遣を了承する形を取った。参加教員は自主参加であったが、参加の意思をもつ教員は全員参加を許可される仕組みであった。当時は学校の研究の軸になる教員の参加が中心であった。毎会の研究経過は「ニュース」にまとめられ、各校の全教員にも知らされた。報告書にまとめられた初期の研究会の成果は杉江修治（2003, 2005）にまとめられている。

犬山市の少人数授業では、基本的に習熟度別のクラス分けを用いず、そして、指導の徹底という受け身の学びを前提とせず、少人数形態を主体的な学びのための形態と位置付けた犬山方式とも呼ぶべきスタイルが定着し、個で学ぶ時間、仲間と学び合う時間を増やした実践が学校間で共有化されていった段階で、この研究会は次第に体質を変えていった。

すなわち、2005 年度あたりから増えはじめた若手教員、また、経験の少ない非常勤講師の研修の場としての位置づけがなされるようになっていったのである。

この研究会は、単なる経験交流の場にしないこと、先進的な実践を見聞きする機会だけにしないこと、と筆者は考えた。

参加者は、テーマ別のグループの中で、

仲間との鍛え合いの過程を通して必ず自ら実践を創りだし、報告書にまとめて発信することを課した。こういう研究会に、各校が、参加希望をもつ若手教員を送るようになったのである。

ここ数年は、校長会が運営を主導し、若手のグループの中に指導的立場がとれるベテラン教員が配置できるよう配慮し、年度はじめの第 1 回目にグルーピングをし、数名のメンバーでテーマを決め、それに基づく実践研究を進めるという形をとっている。毎年参加者は 30～60 人。その 8 割が採用 5 年以内の教員であり、相当数の非常勤講師も参加している。グループの中には、小・中の教員が入り混じっているところも多い。



研究会での取り組みの様子

2008年度からは、参加者から初任者は除くようになった。初任者研修と日程が重なり、休まざるを得ないことが多いためである。このあたりの調整が可能になれば、初任者にとっては有意義な研修機会になると考えられるのである。

2011年度の参加教員は41名、研究テーマは次の通りであった。

- ①子どもたちが主体的に学ぶ授業をめざして一発問・指示・課題の研究を通して
- ②主体的に学び合い、高め合う児童生徒の育成—伝え合う喜びのもてる国語科授業の創造
- ③共に学び、高め合うためのアドバイスを活用した授業作り
- ④すすんで関わり合い、高め合うこどもを目指して
- ⑤生徒ひとりひとりが主体的に取り組む楽しい理科の授業を目指して—ひとりひとりが自分の役割・責任を意識して互いに関わり合い高め合う授業づくり
- ⑥自分を見つめ互いに関わりながら道徳的实践力を高め合える授業—資料の提示を工夫して

2012年度は、59人の参加で9つのグループに分かれての授業研究がはじまっている。6月の段階ではテーマを明確に設定するには至っていないが、領域としては「学び合いの工夫」が2グループ、「国語」が3グループ、「算数・数学」「特別支援」「社会」「道徳」が各1グループという形で出発している。

この研究会では、毎年市内教員の1割以上が参加してきている。若手教員の多くは継続的に参加してきている。自主参加であるので、そういった参加の実態は、一人ひとりの教員への手ごたえを表しているように思われる。

ただ、まだ、若手にどのような成長がみられたかの押さえをしてきてはいない。資料として必要であるように思われる。

また、運営にあたっては、指導的立場の教員の確保がなかなか難しいということがある。役職をもつ教員の仕事量の多さは、校内での若手指導にも差し障りがある可能性があるのであるが、犬山市でも、こうした教員を確保するためには校長会からの働きかけが必要となっている。

2008年度からは、筆者と校長会の担当校長の監修のもとに、研究成果を「実践資料」という形で出版してきている。次のとおりである。

- ①犬山がめざす学力の追究—犬山市授業研究会 2007年度の成果
- ②授業を変える研究的実践の文化の中で—犬山市授業研究会 2008年度の成果
- ③教員力を高める教員の協同—犬山市授業研究会 2009年度の成果
- ④すべての子どもの高まりを促す協同の学びの追求—犬山市授業研究会 2010年度の成

果

この研究会の成果は、年度末には、広く市内の教員に案内を出すなかで発表会も開かれる。

また、年に2回、この研究会のメンバーを核に、「公開授業研究会」という形の研修会を開いている。毎回、市内外の教員約80人が集まって、市内の教員の実践を小・中、1件ずつ、DVDに撮ったものを、実践者本人の解説付きで観合い、2時間以上かけて検討・意見交換する機会としている。

さらに、犬山市実践交流会という形で、1年に1回、市内の小学校と中学校各1校が持ち回りで実践公開をし、参観後、市内の全教員が自分自身の実践を持ち寄り、学年別、教科別の分科会の中で実践交流を図る機会も設けられている。この会では、この2年ほどは小・中の教員の相互乗り入れも奨励されてきている。

### 3. 校内での若手教員研修

犬山市内の学校では校内研修が盛んである。たがいに授業を見合う文化は当たり前のようにならなっている。年間ひとり1授業の公開という形は普通になされているし、年間100回の研修会をもつ学校もあった。

特に若手の育成を意図した研修事例を1件紹介したい。

2010年度、犬山市立城東小学校では、新卒から2年目の教員1名を対象に、教員集団からの働きかけという形で集中的な研修を行った。この試みはその後も続いている。

夏休みに、当該若手教員に1単元分の実践づくりを課し、筆者自身も協議に参加したのだが、研究者と経験のある教員集団がその吟味を進め、秋にはそれを実践に移し、実践記録をしっかりととり、次につなぐ振り返りまで行うという、研究的実践を経験させるというものであった。

テーマは「単元見通し方式」(杉江修治 2011 に解説あり)であり、最初にその意義と進め方の学習をしたのち、夏休みに入って当該教員が1単元分の指導案を提案し、その都度、同じ学年の教員とそのほかの学年の担当であっても時間の都合のつく教員が集まって、それをよりよいものに練り上げていったのである。

ベテラン教員からの率直な助言は非常に有意義であったし、挑戦の意欲を示す当該教員の意欲も、教員集団の反応を引き出すうえで有意義であった。

夏休み半日をかけて3回の研修を行ったが、なお、9月に入って微調整を含む検討会が数回持たれた。この事例では、結局一緒になって授業計画を立てた学年集団全員がその計画に基づく授業に挑戦することとなった。

この研修の経過は研究主任による記録があり、実践経過とその振り返りについては実践

教員の資料があり、詳細な検討が可能な実践となった。その成果は、筆者と校長の監修のもと、『単元見通し学習への挑戦—子どもの主体的な学びを促す「学びのマップ作り」』という形の冊子としてまとめることができた。そこでは、翌年度、すなわち 2011 年度に、学年として自発的に 1 単元分の単元見通し学習を計画・実践する試みもなされたことが報告されている。

#### 4. 若手教員への成長支援の課題

犬山市の事例では、幾重にも重なる若手教員成長支援の仕組みが作られていた。その背景には、授業改革を契機として、さまざまな人的連携がなされていったことが大きいと考えられる。

市長の教育改革支援の態度は明確であり、可能な範囲での財政措置が取られた。愛知県の各市町村では極めて乏しい教育委員会のスタッフも、市費で補充され、実践づくりのパートナーとして指導主事らが活動できる環境がつくられた。事務局のスタンスは、教育長が示した「学校の自律」への支援であり、現場と実践を共に創り上げる活動に多くの時間が割かれた。また研修への支援も常に前向きになされた。

各学校現場では、校長を筆頭とする管理職の考え方が大切である。めざす子ども像をしっかり掲げることのできた学校は、同じ犬山市内でも改革の進みが早かった印象である。目標に向かう教師の努力を支援するという明確な学校経営の方針は、そこに向かって若手をどう育てて行くかという方向づけを容易にする条件といえよう。さらに、学校を横につながるという意図が学校間で形づくられていたことも有意義であった。

また、改革がより進んだ学校で見られた特徴は、ベテラン教員が目覚め、改革に前向きになったということである。教材解釈に優れ、子どもの多様な姿を見てきている経験者が積極的に提案をはじめられる学校の雰囲気づくりは非常に重要であるように感じられる。

さらに、犬山市の実践づくりでは、授業改善をテーマとしてきた筆者が研究者として参加した。その過程では、授業改善の技法よりは考え方を一貫して唱えてきたつもりである。どういう子どもにしたいのかという、実践の核に対する教師の考えがなくては実践の改善はあり得ない。研究者は、それぞれ自らの理論をもっているであろうが、それを現場が主体的に受けとめ、自らの指導理論の中に有機的に位置付けてこそ実践はよくなっていくはずである。犬山市の場合、実践の底に流れる「学び合い」あるいは「協同」という観点は筆者と一致するところであるが、それぞれの学校の実情、それぞれの教師集団の願いにあわせて、市内一律ではない、特色ある実践づくりを志向してきている。こういう文化の中でこそ、若手教員のよりよい育ちも可能になるのではないだろうか。研究と実践の関係性についても意味のある事例であるように思うのである。

なお、本論と合わせて、この報告書では、犬山市の教師の研究成果を 2 冊、CD に焼いて

付録とした。これらは「協同教育実践資料」シリーズの 14、15 巻としてすでに出版したものである。著者及び出版社は内容の複写などに関する制限はしていないので、広く活用願いたい。

## 文 献

- 犬山市教育委員会 2005 自ら学ぶ力を育む教育文化の創造 黎明書房  
杉江修治 2003 子どもの学びを育てる少人数授業—犬山市の提案 明治図書  
杉江修治 2005 犬山の少人数授業—協同原理を生かした実践の事例 一粒社  
杉江修治 2011 協同学習入門 ナカニシヤ出版